

なぜ人々は天井に絵を描いたのか？ —天井画の歴史的変遷に関する文献調査— The art history research on drawings on the ceiling

三浦 慎司[†], 川合 伸幸^{†‡}
Shinji Miura, Nobuyuki Kawai

[†]名古屋大学, [‡]中部大学創発学術院
Nagoya University, Chubu University Academy of Emerging Sciences
[†]miura@cog.human.nagoya-u.ac.jp, [‡]kawai@is.nagoya-u.ac.jp

概要

絵画において、教会や宮殿、あるいは洞窟における天井は、神々や動物などの姿かたちを描く場の一つであった。本稿では、天井に絵を描く、天井の絵を見る、という行為の意味について考察するために、天井画の歴史的変遷を辿る調査を行った。その結果、キリスト教絵画では、キリスト教公認以前から既に、地下墓所の天井に絵が描かれていたことや、スウェーデン島に存在する現存する人類最古の具象画が天井に描かれていたことがわかった。

キーワード：天井画 (The drawings on the ceiling), 美術史 (Art history), 具象画 (Representational painting), 洞窟壁画 (Cave painting)

1. はじめに

絵画において、教会や宮殿などの建造物における天井は、人や物の姿かたちを描く場の一つであった。ルネサンスの巨匠ミケランジェロ・ブオナローティによって描かれたシスティーナ礼拝堂天井画をはじめとし、宗教活動の拠り所となる教会堂や、王族などの権力者が居住していた宮殿など、様々な歴史的建造物には鑑賞者の頭上を彩る天井画が描かれている。天井画の歴史を辿ると、ルネサンス以前の、中世に建造された教会やカタコンベの天井にもキリスト教を題材としたモチーフが描かれているように、キリスト教が公認される以前から、天井に絵が描かれていることがわかっている。さらに、先史時代の美術にも天井に描かれたバイソンや鹿などの動物を見ることができることから、天井画の歴史は非常に長いといえる。

画家にとって、建造物や洞窟の天井に絵を描く行為は壁に描くよりも遥かに困難であることは想像に難くない。それでも、壁だけでなく天井に絵を描き続けたのは、天井画を描くことに何らかの重要な意味を見出していたと考えられる。本研究では、天井に絵を描く行為の重要性を探るために、人々が絵を描き始めてから現代に至るまでどのような内容の天井画を描いていたのか、具体的にいつ頃から描き始めていたのかにつ

いて文献調査を行った。

なお、本研究では、具象画を対象として調査を行っており、紀元後の西洋における天井画、日本における天井画、先史時代における天井画の3つの枠から天井画の歴史について文献調査を行った。具象的な対象を描いた絵のみを取り上げて議論をするため、イスラームのモスクのような模様の反復パターンや建築による天井装飾に関しては本研究では取り扱っていない。

2. 紀元後の西洋画における天井画

中世における天井画

313年のミラノ勅令によってキリスト教が公認される以前、3、4世紀のローマやその周辺地方の共同の地下墓所であるカタコンベには壁面や天井面を飾るフレスコ画が描かれていた。サン・カリストやサンタ・ペテロ・マルチェリヌス(図1-a)のカタコンベ天井画の中心には、よき羊飼いが描かれてように、カタコンベの天井に描かれているモチーフは、キリスト教美術の主題が主であったことがわかっている。

キリスト教が公認されてからは、教会建築が進むとともに、石や、陶磁器、ガラスや貝殻などの小片を寄せ集めて絵や模様を表すモザイクによる壁画や天井画が制作されるようになった。ラヴェンナには、ネオン洗礼堂(図1-b)やアリアーニ洗礼堂(図1-c)を中心に、色とりどりのモザイクでキリストの洗礼を描いた天井画が数多く作られた。モザイクは中世美術の主流の表現方法となり、13世紀にもサン・パオロ・フォーリ・ムーラ聖堂のような天井画も制作されていた(図1-e)。

また、ビザンティン美術における天井画は、トルコに数多く残されていることがわかっている。ギョレメ国立公園とカッパドキアの岩石遺跡群には天井画が描かれている教会が存在する。たとえば、トカリ宮殿では10世紀に描かれたキリストを主題とした天井画の

フレスコ画(図1-d)が見つまっている。また、イスタンブールの歴史地域にも天井画が存在しており、コーラ修道院附属救世主聖堂の天井には14世紀に描かれたフレスコ画が残されている(図1-f)。

近世における天井画

14世紀の前期ルネサンスには、モザイクによる装飾ではなく、写実性の高いフレスコ画が制作されるようになり始めた。天井画においては、ジョット・ディ・ボンドーネによる14世紀初頭に完成させたスクロヴェーニ礼拝堂天井画、アンドレア・ボナイウトによる、サンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂スペイン人大礼拝堂天井画(1367-69)(図2-a)、14世紀後半に作成された、ジュスト・デ・メナブオイによるパトヴェア大聖堂天井画(図2-b)など、様々なフレスコ画による天井画が描かれている。

初期ルネサンスに入ると、クワドラトゥーラと呼ばれる、錯視を利用して平坦な天井を立体的に見せるような、遠近法を利用した天井画特有の技法が生まれた。アンドレア・マンテーニャが1472~74年に描いたドゥカーレ宮殿「夫婦の間」の天井のフレスコ画や(図2-c)メロツォ・ダ・フォルリが1480年頃に描いたサンティ・アポストリ教会の丸天井のフレスコ画(図2-d)はその一例である。マンテーニャの作品では、天使たちが鑑賞者を上から覗きこむような構図になっており、絵画空間と実際の建築の見分けが付かなくなるように描かれている。

盛期ルネサンスでは、ミケランジェロ・ブオナローティによって創世記の9場面を天井に描いたシステーナ礼拝堂天井画が、1508~12年にかけて制作された(図2-e)。ゴシック後期からルネサンス初期において用いられていた人体の遠近感を表す短縮法を発展させた技術がミケランジェロの人物描写に施されている。また、ルネサンスを代表する画家のひとりであるラファエロ・サンティも1508年から1524年にかけてバチカン宮殿に天井画を描いている。宮殿内の「ラファエロの間」と呼ばれる4つの部屋の壁と天井にキリスト教と古代ギリシアの精神を調和させた作品が数多く残されている(図2-f)。

また、初期ルネサンスのマンテーニャらにみられたクワドラトゥーラは、マニエリスムと呼ばれるルネサンスとバロックの中間期にさらなる追求がされている。アントニオ・アッレグリ・ダ・コレッジョによるパルマ大聖堂天井画「聖母被昇天」(1526-1530)(図2-h)

や、ジュリオ・ロマーノによるパラッツォ・デル・テ(テ宮殿)の天井画「巨人族の没落」(1532-34)(図2-g)では、遠近法を駆使して、空に浮かぶ神々を下から見上げたときに目に映る様子を天井に描いている。そのほかにも、マニエリスム期には、天井に何枚もの板絵を飾っている建築物もあり、フィレンツェのヴェッキオ宮殿の「五百人広間」や「フランチェスコ1世の書斎」の天井には、1570~73年にかけて制作されたジョルジュ・ヴァザーリやその弟子による数々の絵画が飾られている(図2-i)。

絵画空間と建築空間の見分けが付かなくする見る者の目を欺くような趣向は、バロック美術の規範の一つになった。初期バロックでは、ファルネーゼ宮殿にアンニバーレ・カラッチによる天井画が描かれており、絵の周辺に額縁を描くことで、あたかも実際に額縁に絵が飾られているように見せている(図2-j)。また、バロックには、マンテーニャやコレッジョらのクワドラトゥーラをさらに発展させた天井画が数多く制作されている。その代表的な作品として、バルベリーニ宮殿に、1633~39年の間にピエトロ・ダ・コルトーナにより描かれた「神の地の勝利」が挙げられる(図2-k)。天井に描かれた柱によって区切られた個々の区画の背後には空が広がり、各区画を超えて人物や雲を自由に往来させることで、鑑賞者の空間と画中空間を連続的に描くことを試みている。同時期に、フランスのヴェルサイユ宮殿の天井画も描かれている。また、バロック期の後の、ロココの時代では、ドイツのヴェルツェブルク司教館や、ヴィースの巡礼教会(図2-l)などの白の目立つ明るい天井画が制作されていた。

3. 日本における天井画

日本の天井画は、主に寺院の装飾のために描かれている。東福寺三門の天井には室町時代の画僧の兆殿司と寒殿司によって、仏教における想像上の生物や天女が描かれている。また、狩野派による龍図が様々な寺院の天井に残されており、1605年には狩野光信による相国寺の蟠龍図が制作され、1656年には狩野探幽による妙心寺の雲竜図(図3-a)が制作されている。また、江戸時代後期の浮世絵師である葛飾北斎は、1846年頃に長野県岩松院の天井に鳳凰図(図3-b)を描き、龍図、鳳凰図、男浪・女浪図(1844年制作)などの祭屋台の天井に配置するための絵画も描いている。いずれの天井画も日本画に特有の平面的な描き方がされている。

4. 先史時代における天井画

先史時代において、人々が絵を描く場は洞窟の壁面や天井面であった。スペインのアルタミラ洞窟では天井には赤と黒で描かれたバイソンが描かれている（図4-a）。描かれた時期は、約14000年前であると推定されており、先史ヨーロッパ時代の区分で主にマドレーヌ期である。一方で、フランスのラスコー洞窟はオーリニャック期である約20000年前に洞窟や天井に絵が描かれていたことが発見されている。ラスコー洞窟の天井面には角の生えた野牛が描かれているのを見ることができる（図4-b）。さらに、インドネシア中部のスラウェシ島の洞窟の天井には約45500年前に描かれたイノシシの絵を見ることができ（Brumm et al., 2021）、この壁画は今日までに発見された人類史上最も古い具象画（動物）の壁画である（図4-c）。

5. 考察

本研究では、紀元後の西洋画、日本画、先史美術の3つに分けて天井画の歴史の変遷についての調査を行った。まず、中世に描かれた西洋の天井画の調査をしたところ、フレスコ画による天井画は、教会や聖堂だけでなく地下墓所にも描かれており、キリスト教美術の最も初期の段階から天井画が描かれていることがわかった。また、先史時代の美術という枠組みでも、天井に絵を描くという行為は、少なくとも具象画（動物）においては最初期から存在していたことが示唆された。これらの事実は、絵を描く場を天井とすることは、人類が絵を描く歴史が始まった頃から存在していた振る舞いであり、太古から、天井に絵を描いたり、天井を観察したりすることに対して何らかの意味を見出していたと考えられる。

学会当日の発表までにさらに文献調査を進め、特に、天井画のモチーフや地域ごとの特色に着目することで、天井に絵を描くことにどのような重要性があったのかの議論を展開する予定である。

文献

- [1] Brumm, A., Oktaviana, A. A., Burhan, B., Hakim, B., Lebe, R., Zhao, J.-X., Sulistyarto, P. H., Ririmasse, M., Adhityatama, S., Sumantri, I., & Aubert, M. (2021). Oldest cave art found in Sulawesi. *Science Advances*, 7, eabd4648. <https://doi.org/10.1126/sciadv.abd4648>

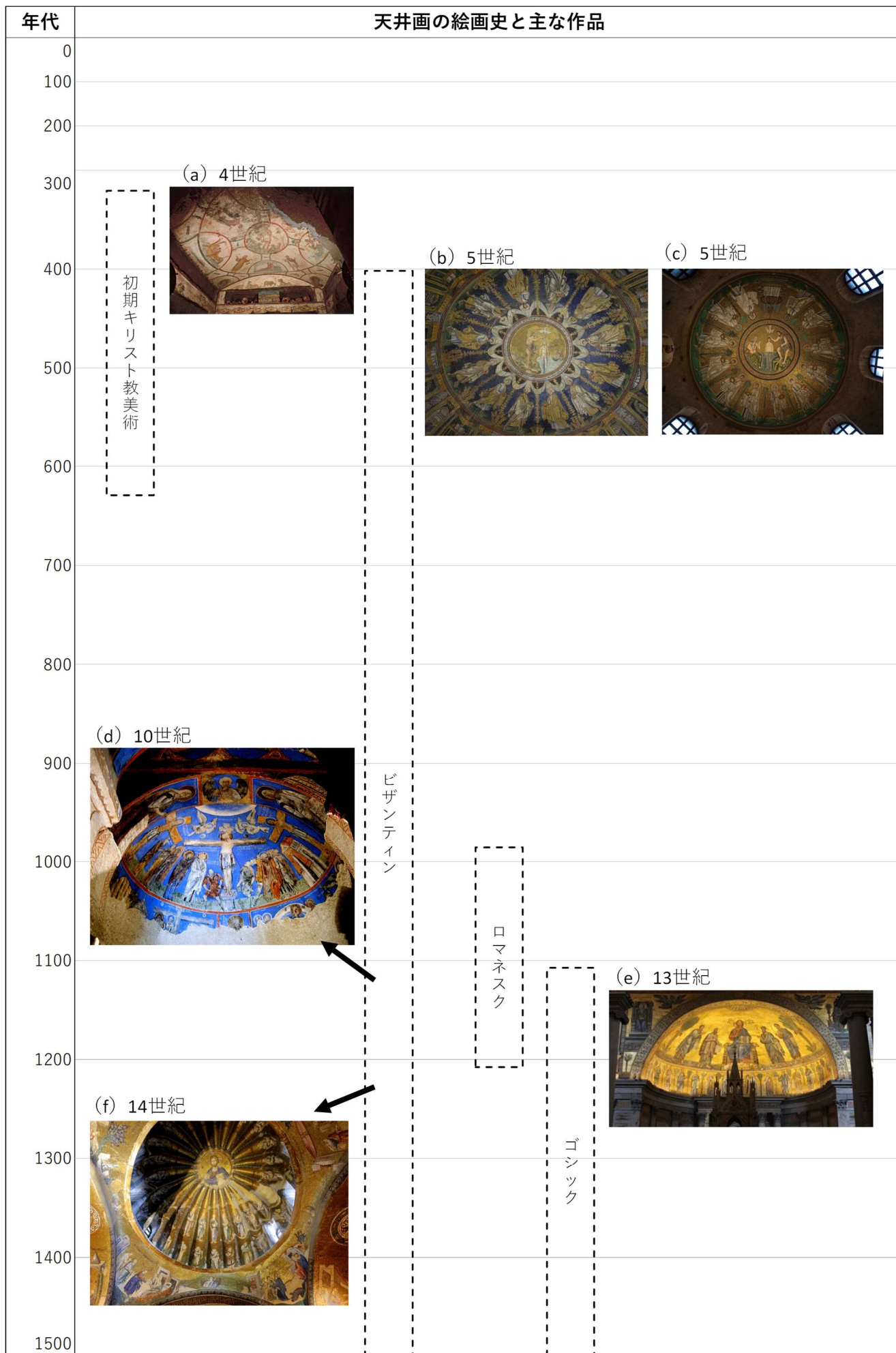


図1 中世ヨーロッパにおける天井画と作品の制作時期

ルネサンス黎明期



初期ルネサンス

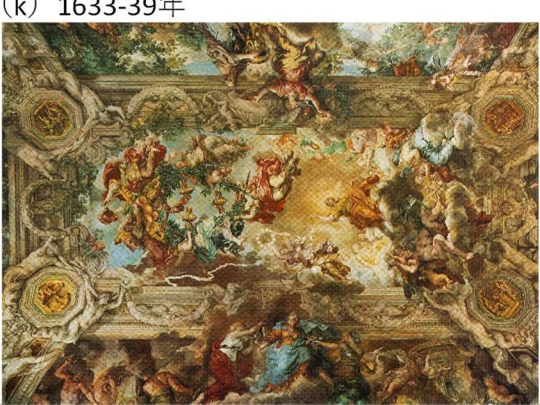


盛期ルネサンス



マニエリスム

バロック



ロココ

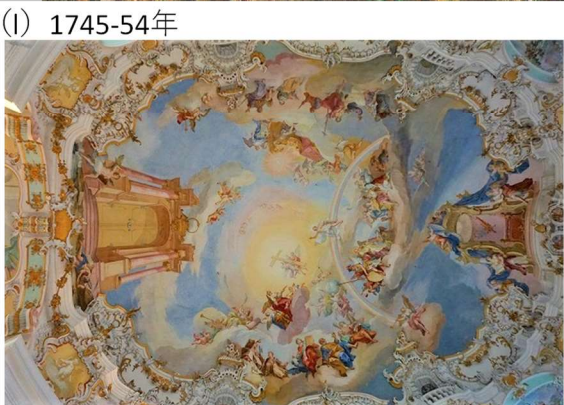


図2 近世ヨーロッパにおける天井画と作品の制作時期

(a)



(b)



図3 日本における天井画 (a: 狩野派妙心寺雲竜図、b: 葛飾北斎岩松院鳳凰図)

(a)



(b)



(c)



図4 先史時代における天井画 (a: アルタミラ洞窟、b: ラスコー洞窟、c: スラウエシ島洞窟)